

祖母からの宿題

「ねえ、おばあちゃん、お願い。宿題でどうしてもおばあちゃんの戦争体験を聞いてこないといけないの。助けると思ってた一度でいいから話して。」

夏休みも終わりに近付いて、たまった宿題を大急ぎで適当に済ませようとした私だったが、どうにもやっかいなものが一つ残った。「戦争について」という調べ学習だった。本を読むのがあまり好きでない私は、祖母に話を聞くのが一番手取り早いと考え、倉橋の祖母を訪ねていた。

「今のおばあちゃんに話しても分かってもらえないかねえ。」

と、祖母は不安そうに私を見ながらしばらく考え込んでいた。これまでも何回か同じように宿題が出て頼んだことがあったが、祖母はこの頼みだけは聞いてくれようとはしなかった。父も母も絶対無理強いしないように私に言ったが、私は祖母が話してくれないことに少し不満を持っていた。

しばらくして、祖母はある場所まで少し遠い散歩に付き合うことを条件に話すことを約束してくれた。

(時間があまりないのに。)

苛立ちをかくそうともしない私を案内してくれた場所は、室尾の町の裏山を越えたところにある大尻郷だった。その一角には石碑が建っていた。祖母はそれをしばらくじっと眺めた後、海岸の砂浜に腰を下ろすと静かに話し始めた。

それは私が祖母から初めて聞いた戦争の話だった。

「あれは私が小学校5年生の時じゃった。原爆が落ちて……。」

私の友達はほとんどみんな、死んでもうてね……。」

いつもにこにこしている祖母が、何度も何度も袖をさすりながら涙を流していた。私は母から聞いた、祖母が夏でも半そでを着ない理由をはっと思い出し、簡単な気持ちで祖母に戦争の話をさせようとしている自分の愚かさやつと気が付いた。

「あの地獄の中、生き残ったものの原爆で親を失って、途方にくれていた私ら原爆孤児を集めて、面倒をずっと見てくださった先生がおったんよ。先生は、明日への希望を失った私達に、ある日、とてもすてきな夢を与えてくださった。それはね、瀬戸内海のある所に海と山のすばらしい自然に囲まれた素敵な島があつてね、そこに私達が住むためのユートピアを造ってそこに私達たちを連れて行ってくださるんだとおっしゃるの。」

「おばあちゃん、まさか、その島って……、この倉橋島？」

「そうなのよ。さつき石碑があつたでしょ。あれは、実はここに戦前、海軍さんの秘密基地があつたことを示すものよ。先生はここを国から借り受けて、私達のための施設を造ろうという計画を勧められていたのよ。先生はこう言われていたわ。『その施設は戦争のために使われた施設じゃ。だからこそ、戦争で犠牲になった君たちのためにこれからは使われるべきなのだ。それがものごとの正しい道理というもんじゃ。』と。私達もそう思うた。あの頃の私達の楽しみといえば、ここに造られる私達の家のことをみんなであれこれ想像してお話することだけじゃったんよ。」



特殊潜航艇基地
大浦突撃隊 大浦支隊石碑

祖母はそう言って、なつかしそうに目を細めた。
「ところがねえ……。」

祖母は大きなため息をついて話を続けた。

「この計画はだめになったんよ。」

「どうして？」

「ここに、占領軍が別の施設を造ることになったからよ。」

「別の施設って？」

「占領軍は、ここに自分らの娯楽施設を造ったんよ。私たちの家を、私たちの夢を壊してね。」

そのことを聞いた時は本当に悔しかった。」

おばあちゃんの目からは涙がこぼれそうだった。しばらく沈黙した後、今度は力強く言葉を続けた。

「けれど、泣きじゃくる私らに先生はこう言われた。『泣くことはない。なぜなら、わしらは正しいことをしようとしているんじや。だから、わしは絶対あきらめん。だから君たちも絶対、あきらめてはいけん。大義は天地を震わすのだ。見ていなさい、いつか、わしらの夢は絶対叶う。』と。その時は何をおっしゃっておられるのか分からなかったけど……。私らも先生もあきらめんかった。」
おばあちゃんは、その時からずっと大きくなったら、この倉橋島に住むことを決めていたという。

家に帰った私は、母にこのことを話した。母は黙って私の話を聞いてくれた後、「お父さんに電話するといいいよ。」
と言った。

私の父は、おのしまがくた似島学園という島の学校で仕事をしている。父は私の話を黙って聞いた後、静かに言った。

「そうか、おまえもおばあちゃんから宿題をもらったんだな……。」

家に帰ってから、父は、先生と祖母たち戦災孤児が力を合わせて、似島にある元軍施設に戦災孤児の施設を造ったこと。それが、今、自分の勤めている似島学園であること。そして、現在も児童養護施設として、その思いを受け継いでいる学校であること。自分は祖母の影響で、この学園の教師になろうと決めたことを語ってくれた。

私は祖母と父に秘められていた深い思いを知り、胸が熱くなった。そして何か、とても大きなものをもらったような気がした。その夜、私はこれまでの人生で一番、真剣な気持ちで作文用紙に向かった。



*似島学園：一九四六年、原爆孤児らの保護収容施設を開設したのを始まりとする。開設に当たり広

島県や広島市に強く訴えかけ、島の旧陸軍施設跡地を借り受け、職員と児童の手によって切り拓かれて作られた。長年に渡る児童福祉の貢献に対して二〇〇二年、第十一回ペスタロッチャー教育賞が贈られている。

